

国学院大学学報

平成28年 3月 第644号 定期号(毎月10日発行) 1部20円

「卒業する人々に」
櫻の花ちりくくにも
わかれ行く 遠きひより
と 君もはなむけ
(春のいづれに)
釈 遥望
祭 儀
▽入学式
4月1日(金) 午前10時 神楽

学問の継続は世界を拓く

卒業生にはなむけの言葉

本学は、平成27年度(124期生)の大学院と法科大学院それぞれの学位記授与式を、3月18日(金)に渋谷キャンパス学術メディアセンター常磐松ホールで、5学部の卒業証書・学位記と専攻科・別科の修了証書の授与式を、3月20日(日)にグランドプリンスホテル新高輪「飛天」で挙げる(卒業証書・学位記、修了証書の授与は、経済学部・法学部が同日午後1時から、文学部・神道文化学部、専攻科、別科が午後4時から渋谷キャンパスで、人間開発学部が

午後1時30分からたまプラーザキャンパスで行う)。そこで、今号は「祝卒業特集」として、124期生に対して、1・2・3面に各機関代表者から「はなむけの言葉」を、4・5面には3月末に定年退職を迎える教職員から「惜別の言葉」を寄せていただいた。6・7面には、卒業後も利用できる、母校各セクションからの重要連絡、国学院大学院友会の諸サービスの案内なども掲載する。



道は拙を以て成る

学長 赤井 益久

卒業おめでとう。定められた期間の学修をおさめ、成果を上げ、新たな門出に際して、心よりお祝いを申し上げます。人生の大きな節目にあたり、これまでの歩みを振り返ってみる必要があります。これからの人生は、過去の延長線上にありません。過去を省みることで、将来は有意義なものになり、自分の力で未来の扉を開くことができるはずです。3つの点について、振り返って見たいと思います。1つは、自分が修めた学問を簡潔に説明できるか。2つ目は、自分が学んだ国学院大学を説明できるか。3つ目は、自分自身を他者に説明できるか、ということ。各自が修めた学問のもつ本質と、それを通して何を考え、何を感ず、自分自身が成長できたか。大学がもつ個性と独自性を理解し、それを自覚しているか。つまり、大学の教育理念である「神道精神」は、「日本人の主体性を保

持した寛容性と謙虚さ」であると定義し、大学はその涵養を標榜しています。また、「明き浄き直き誠の心」とも言われ、明、正直、誠実などの心性を指します。多様性が増し、流動性も加速する社会において、主体性を持ちながら寛容性をあわせもち、誠実に生きていくことは、何にもまして重要であります。そうした理念のもとに諸君は育まれてきたのであります。自らを正しく理解し説明できなければ、他者を正しく理解することはできません。古人曰く「文は拙を以て進み、道は拙を以て成る」と。ここで言う「拙」は「つたない」と言うことではなく、作偽を施さない、飾らない、自分の「素」を意味します。自らの道は、もって生まれた本分を大切に伸ばすことによって、成長できることを指摘しています。諸君の将来が、学問的修養と徳性の涵養のうまに開けますよう、心より祈念しています。



さらなる研鑽と飛躍を期待します

大学院委員長 小川 直之

博士課程後期ならびに前期課程を修了される皆さんに、心からお祝いを申し上げます。ここまで到達した喜びを胸に抱きながら修了式・学位記授与式を迎えられたことと思います。平成27年度は、大学院後期課程では8人に博士學位、前期課程では82人に修士學位を授与しました。学位授与は、日々指導にあたった教職員にとっても喜びであり、誇らしいことでもあります。今日、学位を受けて羽ばたく皆さんの中から、一人でも多く、教員たちを遙かに凌ぐ研究成果や実践成果をあげてくださることを願っています。また、後期課程で論文の提出と審査を済ませて学籍を離れる26人の方々は、研鑽を積み重ねて学位論文を早くまとめられることを期待します。修了するにあたって、もう一度、修士論文や博士論文の作成過程を思い出してください。初めは何をどうしたらいいのか分からなかったり、研究課題が曖昧だったりしたのではないのでしょうか。しかし、自分自身との対話や教員た

「法律という道具」の使い方

法科大学院長 武田 誠

法科大学院の課程を修了された皆さんは、在学中の厳しい試験に耐え、この修了のときを迎えられました。心よりお祝いを申し上げます。皆さんは、数か月後に司法試験に臨まれます。各人、これまでの努力を背景に、新たな覚悟をしておられると存じます。私は昨年度この場で、修了生の皆さんに2つのメッセージを送りました。まず、「自信を持って」と申しませ

た。つぎに、法科大学院に入学した当初の「法曹になるという意欲を」改めて思い起こして受験に臨んでほしい、と申しました。以上の2点に加えて、私は、本年の修了生に、あなたは「法律という道具」をどのように使う法曹にならうとしているのか、という問いを投げかけておきます。「ヒト」といふ動物が「人間社会」を構成する以上、トランプ

式当日に行われる祝賀会について

- 本学では、卒業・修了・学位記授与式後に祝賀会を、渋谷キャンパスたまプラーザキャンパス(人間開発学部のみ)で次のとおり開催します。ぜひご出席いただき、先生方を囲み、同窓生との和やかな思い出の場としてください。
- 大学院・法科大学院 若木タワー有栖川宮記念ホール(午後2時から)
- 文学部 学術メディアセンター多目的ホール(午後5時から)
- 経済学部 3号館「メモリアルレストロム」(午後2時から)
- 法学部 3号館「和(NAGOMI)」(午後2時から)
- 神道文化学部・専攻科・別科 若木タワー有栖川宮記念ホール(午後5時から)
- 人間開発学部 若木21レストロム「ヒルトップ」(午後2時30分から)

みはるかすもの

先月新聞各紙のトップを飾った記事がある。米LIGOチームによる「重力波」観測の報だ。「アインシュタインからの最後の宿題」といわれる100年前の予言の裏付けである、世界中が湧いた▼まさにニュートンの格言「巨人の肩の上」である。宇宙物理学はアインシュタイン博士という巨人の肩の上で、発展してきたとも言えよう▼その博士は大正11年に来日を果たす。旅中にノーベル賞の受賞の報もあり、日本中にざわついた。本学の松下大三郎教授が「国学院雑誌」に「ア氏の相対性原理は迷妄なり」(大正12年1月)を執筆している。国語学者が相対性理論を論ずるほど、博士が注目されていたことが伺える▼有名な話だが、一般相対性理論の発表当時の評価は低く、博士のノーベル賞も「光電効果の法則」によるものだった。しかし受賞講演では延々と相対性理論について論じた▼学問にもやはり廃りがある。しかし継続調査で振り返る研究も存在する。現在常識的な技術の中には、発見当時は無意味とされたものも少なくない。昨今実践的でないこのことで、人文系をはじめ大学教育批判は絶えない。しかし基礎学問、あるいは将来への発展を考慮すれば、目先の評価にだけとらわれてはいけない▼今春も2535人の学生が本学から旅立つ。本学で学んだ年月が自分たち、そして未来の社会への礎になることを忘れずに巣立つてほしい。卒業・修了おめでとうといま